

短期大学創設以来三十年

黒田成子・丹羽淑子（元本学教授）との懇談

藤岡一三十年を迎えました本学短大の設立の頃より大変関係の深い丹羽先生・黒田先生に、短大の組織や機構がつくられるころのこと、また保育科は保母課程・専攻科・サマスクールなどにもふれて、両先生にお話を伺いたいと思いますどうぞよろしく願いいたします。

〈組織・機構〉

丹羽一私は広島女学院に勤務しておりました頃広島女学院は新制大学と短期大学が出来ました。戦後米国に留学の機会を与えられた時に私が勉強したいと思ったものと、学校から勉強してきて欲しいと言われたものは、新制大学や短期大学（Junior College）という新しい教育機関というものはどのような組織体であるかということでした。教育基本政策学の科目では、高等教育における教育行政を学びました。

留学中に非常にイメージとして強烈であったものは、大学の中で第一に考えなければならないのは学生だということです。勿論、大学という機構は、教育の場は教育と研究の二つによっているけれども、何を大事に考えるかという、それは学生なのだということです。ある大学に行ってみてその建物がどのように学生のために設備がなされているかということで、その学校の資質というものの、向っているものが決ってくるということを教えられました。

青年期のカウンセリングの問題、学生を第一に考える時に学生の心や身体の問題、学生が直面す

る問題、専門教育を全うする為に彼等がぶつかる問題などを勉強しました。帰国して広島女学院大学で学生部主任という役割を与えられましたが、その後、家庭の事情で東京に移り、昭和29年東洋英和短大の教員となりました。本学に来た時の印象は、卒直に言って教育はあるけれども組織と言えぬ機構は無いのではないかということでした。もう一つは、大学としての機構の責任者がいないということを感じました。私がかかっていたのは、長野彌氏が東洋英和女学院長と短期大学の学長兼任であるということでした。それから松尾芳子先生は英文科の科長だと思っていました。長野先生から「責任をお持ち下さる方」という風にご紹介がありましたから。でもそれがどうも科長というところまではっきりした職責を与えられていなかったというような、その辺が非常に曖昧模糊としているのです。松尾先生ご自身にも、学校の中にも。それとハミルトン先生は、保育科だけでなく、英文科の方も短大全体のことを見渡していらした印象を持ったので、先生は副学長なかなと思いましたが、保育科長でいらしたのかその辺がよくわからない。何か職責を聞くということ、何々長と呼ぶことが何となくそれこそリラクタントでした。そういう話題を出すことすらリラクタントで、これは何だろうか、謙遜だろうかと、私は問い続けてきて、未だに答が出ないのです。この事が明らかでないから、機構が、組織がきちっとしていないのであろう。組織がきちっとして

いるならば、その組織体の中で責任をとる者がはっきりする。これは「長」ということが烏澁がましいとかではなく、責任の所在を明らかにすることであると考えると、何故その所がはっきりしないのが非常に不思議でした。

＜教授会＞

当時英文科の専任教員は松尾先生の他、会津常治先生と私でした。河村重治郎先生はフルタイムの教員ではなく、週一日朝から夕方までいらして一週間の責任を遂行された。今もしそれを教授会と称するならば、年に何回か春、夏、前期の成績時、後期の成績時の極く僅かでした。それ以外は常勤教職員会と称する教員も職員も一緒に大学の機能を果たすための相談会のような、打合せ会のような会がありました。

黒田一丹羽先生が教授会も全然組織されていなかったとおっしゃいましたが、私が就任した（昭29年9月）時にスクルトン教授（保育科）に先生方の相談の会もないのですかと聞きましたら、教授会というのはないけれど、いつも松尾先生とハミルトン先生で全部決めているとのことでした。そして「あなたは実習が忙しいからいいわよ」と言われていますとおっしゃいました。スクルトン先生が午前中学生の実習を見廻っていらっしゃる間に、ハミルトン先生と松尾先生が話し合って事を決めた。それが教授会の前身だったようです。

＜科長制度＞

黒田一その後2年位して関根文之助先生がいらして初めて「科長」という言葉が出て来たのです。昭和36年に組織表が出来て保育科長関根、英文科長松尾となりました。

丹羽一昭和25年に短期大学（保育科）が認可されました。文部省に提出した書類には必ずその責任者の名前は記入されてあるし、職名も教員名もあったと思うのです。私は初めから保育科があれば科長があるのが当たり前、英文科があればその

科長があるのが当たり前だと、そうすると英文科は松尾先生という風に思っていました。私の印象ではどうしてもミス・ハミルトンは副学長のような位置にいらしたと思う。それと同時に保育科の科長の責任をもっていらっしゃったと。

＜学生部＞

丹羽一第11号にも書きましたように、保育科はキリスト教保育者の養成というはっきりした目的をもって既に永い歴史の中で教育機構はきちんと出来ている。英文科はリベラル・アーツとして出発した。水と油みたいになんか二つの特徴の違うものが一緒になった。機能は各科単位で運営されていた。しかし、学生はこんな小さい学校で一つの屋根の下で、二つのコースで、学生の交わりがちともない。学生全体として学生を見るということがない。これでいいのだろうかという疑問を初めからもっていました。そこへミス・ハミルトンが学生を世話する人がいなくてはいけないと言われて「You will be it」とおっしゃった。その言葉が忘れられません。私がここへ来るときに、長野先生からのお手紙の中に、これこれの科目と、そしてあなたには学生指導をお願いするということが書かれてあった。

黒田一学生がいるのに学生部という名称がなかった。「学Y」（学生YWCAの略）が一番大きな部で、保育科の中で学Yの活動が非常に盛んで学Yに選ばれた会長が今で言えば学友会とか学生会の会長というようなものだった。学生部的活動は学Yがやっていました。例えば、子ども会をするとか、どこかへボランティアで行くとかを全部学Yがやっていました。けれど英文科が出来て両方吸収するようないわゆる学生部は無かった。そこへ外国で勉強していらした丹羽先生がいらしたので、ハミルトン先生はこの先生こそと思って「You will be it」とお頼みになったと思います。

丹羽一組織ははっきりしていなかったが、今日までずっと続いている英和への愛着というか尊敬というか、そういったものが根底にあるのは、まさに教育があったと言いましたように、特に保育科というものには非常に歴史というものの重味を感じます。そして主張があったわけです。私はその主張はとても素晴らしいものだと思います。教職員会の席でミス・スクルトンが主張され、話される動かし難い信念が感じられました。この頃、学Yへは他の部に入っているにも二重に入ること認めて、すべて学Yを優先するようにした。その両科を一緒にして学生会が学友会のクラブ活動と学生自治会のような性格のものを包含した学友会というものの構想を考えたのです。

黒田一そしてYWCAの組織につながって学Yがありましたが、YWCAと関係を切ってこの学校だけの学生活動として、たしか宗教部に名称を代えた。

丹羽一宗教部を置こうか置くまいか、学Yだけでよいのではないかという、学生全体の組織を作るということに対して議論があった。その時ミス・スクルトンをはじめ保育科の先生たちが一番反対されたのは、保育科生はとても忙しい、そして、キリスト教保育者の養成をされて立派な教諭になるためには二年間では足りない位だ、学生生活がいわゆるエキストラ・カリキュラム アクティビティという余暇的なことに憂き身をやつしている時間はない、ということでした。反対の一番の親玉はミス・スクルトンだったと思う。鎌倉千楨先生も相当に強烈だった。教授会が、教授会という機構のない時でしたが教育の本質について丁々発止とやり合いました。

保育科の学生から一緒に組織が欲しいという意見が出されました。両科代表の学生達とも話し合いましたが、当時保育科の学生は地方からの人達もあり、英文科生は英和の高等部からの人が多く

興味も関心も違って、ほんとに水と油みたいだったのです。

黒田一一生懸命両科の歩み寄りを考えました。今でこそ道で会ってもどちらが保育科生だか英文科生だか分からない位全く一緒になってしまいましたが、それを一つの近代的なものの考え方の路線に乗せるのに何年もかかり丹羽先生もご苦労なさいました。保育科の先生達の意識、学生の意識を柔かくするのに大変でした。

丹羽一私はほんとうに愕然としたのです。長野先生は木造の校舎でびっくりしたろうとおっしゃいましたが、その建物は非常に簡素で、これが教育の場だという印象がありました。機構がなく、しかもそれで運営しており、中に何かそれを動かすものがある。一つのインスティテュションというものが組織体なしにどうしてやっていけるだろうかということをつつも問い続けて来ました。けれども組織がきちっと出来上がったとしても、それを動かすのは人間ですから、どんな人がその機構を動かすかということになるので両方は不即不離です。でも私はこう考えるのです。組織があってもそれがマイナスに働くとそれが壁となって融通性が無くなってしまいます。

私は両科の学生を抱える学生部を作らしてもらって、それがどんな風になって行くかということを考えようと思いました。そして学友会の部長とか、どんな役割をするかということが出来てきました。この校舎が新しく建つまでは建設期であり、土台を作る時期でした。

<文化祭>

学生が自治的なものをもってクラブ活動を通しての人間形成といった面で両科の異質なものが交わって初めて素晴らしいものが出来てくる。ホモジニアスは駄目だというのが私の主張なのです。だから勉強は勉強ですけれども、人格の面に於て交わることによって両者が成長できるだろうとい

う気持ちで、どうしても二つを合せたいと思っていた頃に、それを実現させる盗難事件が起って（昭32年）文化祭が始まったわけです。事務所の金庫の中から盗まれたのです。

東光会の方々もバザーをしていただいて一緒にやりました。そこで学生達が燃えたわけです。それで初めて、あゝ、学友会活動の一つのハイライトをそこへ持って行こう、そして一緒にやるというアクティビティの中で保育科と英文科との交流ということがもっと密になって、どこかで発散して発表していく場が必要だということが分かりました。

〈保母資格取得〉

黒田一学生達の意識が非常に狭くて、それこそ保育観も狭くて、教会幼稚園に奉仕するということだけでした。保育観をもっと広いものにしなければならぬという発想で、保育所のことも知ったらよいのではないかと提案したのです。ところがこの学校は幼稚園教諭を養成する学校で、明治38年からずっと素晴らしい伝統があるのに保育園を考えるのはいけないということで保育科の中ですごい突き上げがあって、それはもう反対だということで非常に難しかった。ですけれど私は幼稚園という城に閉じてもっているだけでなく同じ

子どもで、ただ文部省と厚生省と管轄が違うだけです。だから保育所のことにも保育科は目を向けなければいけないということを非常に言ったわけです。

建て前として三つあげますと、一つは子どもについての理解が不足している。子どもというもの、いわゆる幼稚園に来ることのできるような家庭の子どもしか見ていない。今でこそ保育所の子どもたちとは殆んど変わらなくなりましたけれど、その当時はやはり保育所に来ている子どもと違いがありましたからね。それでそういう幼児についての理解の不足ということがあるということ。二つには、社会認識に対する理解の不足、甘さ、教会などキリスト教の幼稚園しか知らない、もっと広く出て行った方がよいということ。三つ目は保育観の狭さを広げたい。幼・保に分かれていることは制度上やむを得ないことですが、せめて学生達が同じ子どもに対する理解をもってほしいということ、の三つの理由をあげて科長の関根先生を説得して、保母資格（厚生省から出る保母の免許状）の取得に乗り出しました。保育科の中で反対がありました。昭和35年の要覧には「保母課程の兼修」とあります。谷川貞夫先生にご担当をいただいて科目の単位は取れるようになりましたが、実習は2週間で不足でした。（昭和35年）それ



かえで祭 昭和31年11月

がなかなか保育科の中で一致をみませんでした。

藤岡—その頃多分、保育実習は10単位というとても多い時代だったと思います。そのうち教育実習の4単位が振替えられて、6単位をとらなければならなかったと思います。現在は、保育所2週間、施設2週間の4単位が必修で、更に選択で2週間の実習をすることがのぞまれています。

黒田—ともかく、当時は学科目も足りなかったし、実習期間も足りませんでした。昭和39年から正式に資格がとれることになり、授業はケース・ワークとかコミュニティオーガニゼーションに加え、看護学、精神衛生などを入れました。

学生を最初に保育園へ出した時に一様に言われたことは、何て素直なお嬢さん達なのでしょう、東洋英和の学生は。マイナス面ではエリート意識が非常に強くてもう手も足も出ない。今でもその傾向が残っています。

特に西洋の先生は反対で、幼稚園教育としての内容も整わないのに保育所保育まで手を出すことはないということでしたが、現在のように福祉も教育も養護もみな一体にやる時代になりましたからあの頃保育資格を取れる段取りを取っておいてよかったと思います。

〈紛争〉

丹羽—そういった建設の頃があったにもかかわらず、紛争の時はこういう問題でしたからね。

黒田—紛争のこともこれに関連があります。紛争というと非常に大学なみの言葉ですが、ミニ紛争みたいなものがありました。紛争に二種類ありました。一つは保育専攻科から出た問題で、もう一つは本科から出た問題です。専攻科の方は丁度昭和38年4月に保育科も英文科も1年ずつの専攻科を設置しました。43年に保育科だけ指導者を養成する必要があるということで2ケ年の専攻科が要望された。いわゆる幼稚園の教員養成だけでなく短大の教員を養成するところです。教諭の

先生のようなティチャーズ・トレーニングというような要望が出たのです。それで2ケ年の専攻科ということでこれ又一悶着ありました。

文部省からも奨められて43年度から2ケ年が発足したのです。ところが44年の時点で一級免許が取得出来ないのではないかという噂が流れました。それまでは実際の現場での経験が3年間と短大の専攻科での2ケ年を合せれば幼稚園教諭の一級免許が貰えるということになっていたのです。学校教育法の中に大学の免許の最後の個所に、「専攻科を設置して一級を認める場合もあり得る」という漠然とした二三行が備考欄に記載されていたのです。それで願いを出しました。短期大学で2ケ年の専攻科を設置している学校が5校あってそういう指定を受けました。

一級が取得できるというので沢山の応募者がありました。それでやっていたら、44年4月頃の時点で一級が取れないのではないかという噂が流れて、学生達が騒ぎ出したのです。学校側は全国の5校が結束して文部省に掛け合いましたら、確かに今までは一級を出していたが、あれは条文の読み方次第で解釈が違ってくる。従来のは東京都知事と教育委員会で行われていたが、44年度から教育委員会だけで取扱うことになって、担当係官も代ってその条文の読み方が厳しく読み替えるようになった。為に43年度入学者の一級取得は出来なくなると言われました。それではそういう約束で入学した学生達に申し訳ないので、すぐ運動して結局45年度入学48年度終了した人までは与えるという特権を取ったわけです。

その途中の時点で学生達が非常に騒ぎ出して、質問状を突きつけて来ました。内容は、話が違いうということ、一級が貰えないではないか、学校は何をしているのかということと、授業内容に思想性が欠けているなどずい分突き上げられました。

11月下旬に本科で就職の問題が起きました。

幼稚園と保育所に対する考え方に差別があるのではないかということも問われました。また事務を扱った者の態度も学生を刺激することになりました。その頃はだんだん学生部が充実してもう水と油が大分解け合って来ていました。で学生達も非常に合理的なものの考え方、近代的なものの考え方をしはじめており、又全国の大学紛争の余波も食いました。

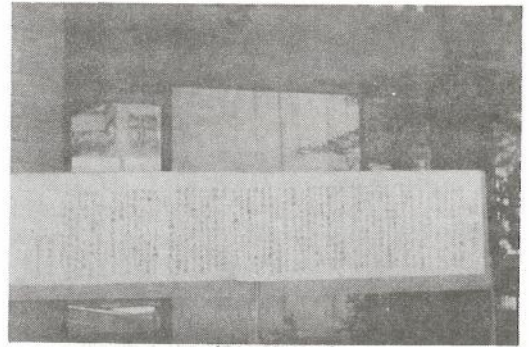
もう一つは英和のキリスト教教育の姿勢を問うという「敬神奉仕が空文化しているのではないか」、「形骸化しているのではないか」と言ってきました。教授会を通して答えましたが、「教授達は全然わかっていない」とか「何をしている」とか「欺瞞に満ちた教授会」とか言われました。立看板も立ちました。

卒業礼拝も数人の学生の妨害によって行うことができなかつたのです。

次の日の卒業式ができるかどうか非常に心配で丹羽先生が根廻しをしてもかく挙行しました。年度の終りには收拾がつきました。それをきっかけとして新しい宗教主任伊藤之雄先生を迎えたり、学校側の制度を変えて科長制度を廃止し、科主任制度となりました。

斉藤—そうすると、保育科の学生が殆どで、英文科の学生はその時どうだったのですか。

丹羽—当時は学生部と学友会の二つの組織体が自治的に総て運営できるまでになっていました。学生会の会長が保育科生で、学生会の方から問を起して来た。というのは、委員の選出の時選挙委員会が施政演説会を開いても学生達の意識が低い、学生会の総会に集るときも時間がかかる、学内にいても参加しない人が多い。それでは誰の為の学生会かと。英文科の学生は彼女らのように燃えない。意識の低さというのか考えていないわけではないが総会に出たり、意見を言うのは50%位でした。で、学生会の会長は一生懸命やっているの



抗議文 昭和44年11月

に皆の意識が低い、誰のための学生会か、必要でない学生会を続ける理由は何もないといって、すっかり壊して解散してしまったのです。

英文科の学生は何となく第三者的な様子で見ている。彼らの中にも立看板に対して学校はどういう解答をしているのか、止めさせたらいいではないか、先生達は手ぬるいといった意見はありました。そんな事で全体が揺らいでいた時に、卒業礼拝の時に何故礼拝を阻止するのかと立ち上がったのは英文科の学生です。

黒田—そうでしたね。

丹羽—「私達は礼拝を守りたい、その為に今日ここに来ているのだ、あなた達がそれを阻止する権利はない」と泣きながら彼女達は言いました。

その後すぐ教授会が開かれ、これでは卒業式が破壊されてしまうから卒業式は行わず、科別で卒業証書を授与するという事に決定しました。教授会の決定ではありますが、卒業式は学校が行うが、やはり主体ということを見ると学生を抜きにしては考えられない、こういう事態が起って卒業式をしないということに対して学生にもう一度意見を聞きたいということになり、科別々に学生に成り行きと教授会の決定を説明して了承してほしいと求めましたが、両科生とも数名を除いて卒

業式をしてほしいと言ったのです。

黒田一保育科でも良識ある連中が意見を言い出しました。

丹羽一英文科の学生も良識は持っているのです。初めのうちは速くから見ていてその中に入らないが、自分の家が揺さぶられるようになった時はじめて「あなた達はその権利はない筈だ」と言いました。そんなことで結局は卒業式はとにかく又、行うということに変わったわけです。

それは教授会でもうみんなにやられて…。賛成の方だけ手伝って下さい、あとは私達でやりますからといって、その晩長野院長と私の徹夜の電話の交渉でした。卒業式は高等部の女性の体育の先生方に協力していただき、私が司会をしました。非常に緊張の中の式でしたが無事終わりました。

黒田一そして学生も気持を翻えて、いい答辞を述べましたね。

丹羽一最後の卒業式だから学生の気持ちを大切にしたいと思った。それがまあ良かったと思うのです。それから自主ゼミもやりましたね。その時は東山荘での修養会のときで、若い先生方が我々が標榜しているキリスト教々育—これはどういう意味なのか、「敬神奉仕」というのはどういうことなのかということの準備をして下さって東山荘でやって下さった。伊勢先生と私は留守の責任をとりました。そこへ残った学生が自主ゼミのために招いたK学院大学のT先生がみえました。私は学生部長として責任がありますからゼミが終わってからT先生に丁寧に挨拶をしましたが、お帰りになった時の姿を階段で見送ったときのことは忘れられません。次からは御自分で控えて来られませんでした。それで私の総括としては色々の問題に、どういう風な迫り方でどうこの問題を理解したらいいかということの私なりの考えがあったものですから… どのように紛争が起り、何を契機として起ったか、そしてどういう風にそれが終着する



卒業式 昭和45年3月

かというところには、大学そのものの教育の質が問われると思っていましたから。ほんとうに問われたと思っていました。そして終り方は我々に非常に大きな一つの刺戟を与えてくれました。教員も学生も一つ一つの自分の問題として関わり最後に考えたということ。

このことは、しかるべきところで十分な説明を私はしたかったわけなんです。それがどう結末がついたか、どういう風にそれが教育の上に影響を持ったかということで歴史が意味を持つと思います。

< 研究 >

丹羽一最後に一つだけ研究の問題を…。短期大学は四年制大学や大学院大学と違って教育に比重があることは分っています。私は専任者の研究は教育のための研究といってもいいと思うのです。研究の面の必要性はすでに出発の段階であったと思います。短期大学であれ四年制大学であれ、大学での研究ということはどうなのかという問題を非常に強く意識の中に入れていたのです。研究の場でなければ人は得られないですから。短期大学というのはいろんな隘路があるわけでしょう、機構は多少のことがあっても、そこで教える教員の資質の問題は大事だと思いますから、どうしても「研究紀要」というものは必要だと思っていました。芝原一「論集」第一号が昭和38年に生まれ

た。

黒田—私が昭29年の後期から来ました頃は、短期大学としての教育の場での研究は話題にもなりませんでした。

丹羽—私は願い出て一週に一日だけ大学院に行かせてもらいました。その頃専任者は月曜から金曜まで毎日出て、学生の問題でも相談でも関わっていたのです。今、専任者は非常に研究の機会が与えられているわけですね。あの頃の私は特例で、それを気持ちよく許して下さった松尾先生、長野院長、ハミルトン先生のなかに、大学では研究ということを大事に考えなければならないというお気持ちがあったのだと私は思うわけです。

短大は最初は教授会というのはなかったけれども、教育に全員が当るといふ姿勢で始めたわけですね。芝原先生は戦後の図書館の勉強をなさって現在の図書館を造り上げることをして下さって、その事だけでも大変な事だったと思います。その上に担任をしていただき、同じように学生の指導で話し合うことがとても多かったわけですよ。出発の精神というか、用務員の方たちを入学式の

時に紹介をするという伝統も、それぞれの所で軽重はないという考え方ですね。それを是非これからも育てて頂きたいことだと思います。こういうところが英和の精神だと思うのです。

黒田—いわゆる組織とか、近代化というのが遅れましたけれど、それは後から整備されて来ているからです。

丹羽—人間の存在をいつも大切に考えていったと思います。

藤岡—学生紛争も表面的には色々ありましたが、そこには学生と先生のもつ大事な関わり合いで乗り越えたということが大きかったと思います。短大の歴史そのもののような存在でいらっしゃる両先生でいらっしゃいますから、まだまだお話つくせないのではないかと思います。また私どもも伺いたいことがあります、今日は先生方どうもありがとうございました。

1981年6月19日 於 短大会議室
聞き手…齊藤、朽木、藤岡、芝原
採録…加藤、文責…藤岡、芝原

資料に見る30年(2) 1960-

東洋英和女学院短期大学

(年度)

(史料室および短大図書館所蔵資料より)

1960 昭和35年度全学修養会プログラム(案)
(プリント)
全学修養会 (しおり・写真)
東洋英和女学院短期大学第十回卒業式
式次第
1961 収容定員の変更 保35→45名 英40→100名
短期大学諸規程 昭和35年5月現在
短期大学内組織図 (プリント)
保育科課程 (プリント)

事務機構 (プリント)
カナダ首相夫人、ミセス・ディフェンペーカ
学院訪問 (短大新聞記事・写真)
東洋英和女学院短期大学新聞“楓”第1号
(第1号-23号)発行 短期大学新聞部
“イヌエンジュ”1号 発行 学生YWCA
(1号-5号)
かえで祭記録1961~かえで祭実行委員会
1962 入学式 式次第

- 創立記念日動続25年表彰 (写真)
- 創立記念日受洗者 (写真)
- 教職員全員 (写真)
- "Kaede" 創刊号 発行 英文科卒業生
- 1963 専攻科設置 保20名 英30名
東洋英和女学院短期大学 学校案内
昭和38年オリエンテーションプログラム
講義要覧 英文科 第1号
論集 第1号 (研究紀要)
- 修養会の栞
- 教職員修養会(4・20) 箱根 (写真)
- "Maple seed" II ESS
- "野菊の墓" シナリオ 放送研究会
- クリスマス燭火讃美礼拝1963プログラム
- 1964 学院創立八十周年
Toyo Eiwa Jogakuin Junior College
1964 学校案内
学事暦 (プリント)
- Student Hour (プリント)
- オリエンテーション (写真)
- 学生手帳 1964
東洋英和女学院短期大学 昭和40年度
専攻科(保育専攻)聴講生募集要項
"童話作品集" 1964, 1965 保専文学の時間
創立八十周年記念行事関係資料(プリント、
プログラム、写真、記念品)
- 卒業修養会 (プリント)
- 1965 始業礼拝 (プリント)
東洋英和女学院短期大学 入学案内
増築研究委員会 第1回 (プリント)
- 1965年度スチューデントアワー (プリント)
- 図書館だより 第1号 発行 短大図書館
ハミルトン先生送別会 (会次第・写真)
- クラブ名簿 学友会
昭和40年度学友会予算 (プリント)
- かえで祭 反省会、反省事項 (プリント)
- クリスマス献金について (プリント)
- 送別会 プログラム
学生会主催感謝会 プログラム
謝恩会 案内
- 1966 講義要覧 保育科 第1号
修養会報告書 保・英 学生
東南アジアキリスト教保育者協議会プログラム
第3回チャリティ・コンサート 盲精薄児施設設立
のために 主催 保育科有志 (券、他)
- 図書目録 第2号 短大図書館編
保育・幼児教育関係図書目録(昭和40.3月まで)
"はぐくみ" 創刊号 発行 保育部会
- 1967 短大增築開始
住居表示変更お知らせ (はがき)
短期大学学生に関する諸調査 用紙 学生部
昭和42年度学生実態調査報告書 学生部
時間表 各科学年 時間割
学生の日講堂プログラム かえで祭実行委員会
講演 三笠宮様「人類最古の文明について」(写真)
かえで祭各クラブの配布物
東洋英和女学院短期大学校舎増築募金趣意書
保育部会・かえで会
- 1968 保育専攻修養年限を2年に変更
短大新館竣工落成 10月4日
短大增築落成式 案内、プログラム 等
短大校内改裝
電話番号変更のお知らせ (はがき)
美しが丘土地購入
RETREAT 修養会を改称 (しおり等)
The London Shakespeare Group (上演プ
ログラム、写真)
待降節讃美礼拝 (プログラム・写真)
小児相談センター開設 11月30日 (関係資料)
- 1969 学院創立八十五周年
教会案内 教会へ行きましょう 宗教委員会
Retreat News No. 1-3 (プリント)

- "貝がら" №3-5 発行 学友会
 長野彌院長藍綬褒章受賞お祝いの会(写真)
 創立85周年記念運動会(プリント、写真)
 宗教活動に関するアンケート 宗教委員会
 討論会「安保体制を支える英和」・「英和のキ
 リスト教教育に関する質問状」他 (ビラ)
- 1970 東洋英和女学院短大だより 創刊 短大広報
 カンファレンス RETREATを改称
 (しおり・写真)
 全学カンファレンス計画の進行状況の報告
 "かしゅう"カンファレンス歌集
 1971年度カンファレンス アンケート用紙
- 1971 木造校舎(旧講堂)とりこわす
 幼児教育サマースクール第1回 (冊子)
 東洋英和の歌"おともだち" 楽譜
 創立87周年記念音楽会 (プログラム)
 '71クリスマス特別礼拝 (プログラム)
 46年度かえで祭に関するアンケートまとめ
 お知らせ 卒業週間の日程 (はがき)
 長野彌院長送別式 式次第
- 1972 長野彌先生送別の会 (プログラム)
 石井次郎院長就任式 式次第 第2代学長
 短大附属かえで幼稚園設立 中間報告
 かえで幼稚園起工式
 研究紀要 第10号 (論集改題)
 新着図書だより 第1号 発行短大図書館
 "がんは"1号(1-3号) ワンゲル部
- 1973 かえで幼稚園献堂式 記念品
 園児募集要項 かえで幼稚園
 学生レポート選集 第1号 1972年度 英文科
 学生レポート選集合評議会のお知らせ
 オリエンテーション・カンファレンス (しおり)

- キリスト教・哲学情報 ('73・5~'74・4)
 英文科特講のお知らせ (プリント)
 昭和48年度保育専攻科研究論文発表評価
 の会のお知らせ (プリント)
 卒業カンファレンス (卒業修養会改称)
 (しおり・写真)
 卒業礼拝、卒業記念講演 (プログラム)
 "保育所を育てた娘たち"筑豊 保育科卒業生
 (新聞記事)
- 1974 学院創立九十周年
 昭和49年度学層変更 (前期試験を7月
 中に行う) (短大だより)
 保育証書授与式 第1回 かえで幼稚園
 オリエンテーション・プログラム(プリント)
- 1975 学生レポート選集 第1号 1974年度
 保育科
 レポートの書きかた 保育科
 "神話と演劇" 英専 「英米演劇」
 故ミスF.G.ハミルトン追悼記念礼拝
 (プログラム、テープ)
 石井次郎院長・学長退任 送別式(写真)
- 1976 光明照子院長就任式 式次第
 黒田成子学長代行
- 1977 光明照子学長就任 第3代学長
 学生便覧 (学生手帳改称)
 らいぶらりい'77((図書館利届案内)
 "つどい"第1号 発行 学生会執行部
 保育レポート 第1号 発行 かえで幼稚園
- 1978 学友会活動の手引 昭53年度 第1号
 小児相談センター報告 昭53年度 第1号
- 1979 学院創立九十五周年
 田島信之学長就任 第4代学長(関係資料)
 東洋英和女学院短期大学学則 昭54.4.1施行

—あとがき— 15号は、短大の組織・機構が創設時よりさまざまな経緯をへて現在に至っておりますことを、黒田・丹羽両教授より伺いテープにとりましたものをまとめました。御多忙な両先生には特別に御都合いたさうてお話ししましたことを厚く御礼申し上げます。(短大 芝原・藤岡)